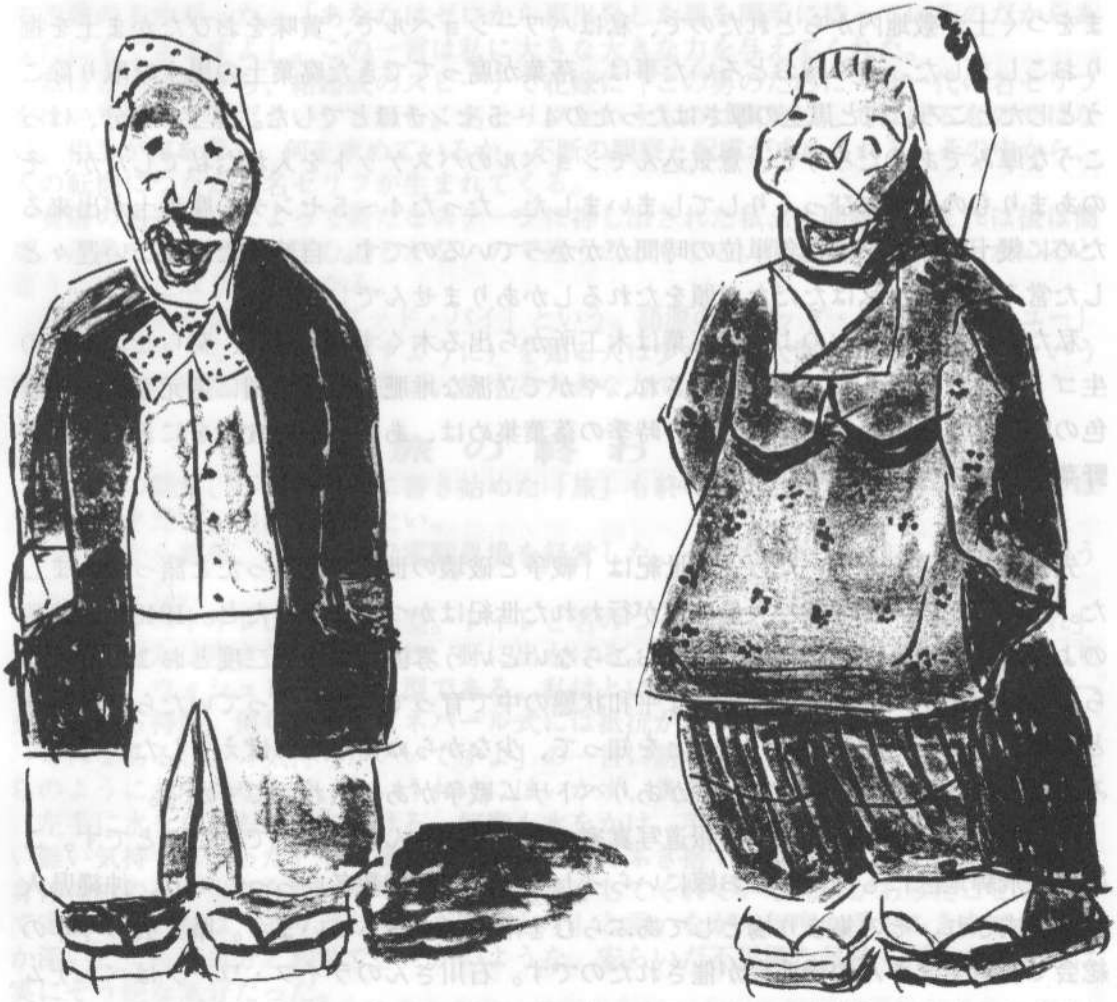
あぶらむ通信

第22号　2000年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県吉城郡国府町宇津江
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
メールアドレス　abram@mb.i-chubu.ne.jp



「老後の二人」
絵　イク　オオゴ

飛騨便り

今年は何をやっても、「今世紀最後の」というビックな形容詞のつく、スケールの大きな年です。私は今世紀最後のあぶらむ通信を時間に追いかけられながら書いています。今世紀中に書き終るでしょうか。皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

師走を迎えたこの時季にしなければならない作業に、敷地内道路の落葉集めがあります。そのままにしておくと濡れ落葉になって車がスリップしたり、また朽ちかけてくるとやっかいな代物になってしまうのです。はき集める量は半端なものではなく、高さ3メートルほどの小山があっという間にできてしまうのです。心卑しい私は、「これがお札だったらなァー、一万円札、いや千円札、いやいや一円札でもいいから」と、そんなことばかりを考えながら落葉集めをしている私です。この時ばかりはタヌキにだまされたいと真剣に思うのです。

昨年、あぶらむの里での体験学習のために炭がまをつくりました。幸運なことに、かまをつく土が敷地内からとれたので、私はパワーショベルで、黄味をおびたかま土を掘りおこしました。その時おどろいた事は、落葉が腐ってできた腐葉土の黒土を取り除こうとしたところ、何と黒土の厚さはたったの4～5センチほどでした。黒土の部分、けっこうな厚みであるだろうと、意気込んでショベルのバスケットを入れた私でしたが、そのあまりもの薄さにびっくりしてしまいました。たった4～5センチの腐葉土が出来るために幾十年、いや幾百年単位の時間がかかっているのです。自然のたゆまない遅々とした営みの前に、私はただただ頭をたれるしかありませんでした。

私たちが集めた小山のような落葉は木工所から出る木くずや牛フン、腐らせた家庭の生ゴミ等々とまぜあわされ、野積され、やがて立派な堆肥となって畑に還元され、健康色の野菜となっていくのです。この時季の落葉集めは、あぶらむの食卓をにぎわす健康野菜づくりの大切な仕事なのです。

先日ＢＳ放送をみていたら、20世紀は「戦争と破壊の世紀」であったと語っていました。これほどの大量殺戮、大量破壊が行われた世紀はかつてなかったと。1946年、終戦のよく年に生まれた私、戦争はもうおこらないという雰囲気の中（二度とおこしてはならないのですが）、戦争とは無縁な平和状態の中で育ってきたと思っていたら、「戦争と破壊」のただ中に育っていたことを知って、少なからぬ衝撃をおぼえました。考えてみれば自分の成長の横に朝鮮戦争がありベトナム戦争があったわけですから。

今年の大きな喜びの一つは、報道写真家の石川文洋さんとお会いできたことです。この寒い飛騨地区にも沖縄からお嫁にいらっしゃった方が20数名いらっしゃり、沖縄県人会が結成され、その集まり場としてあぶらむを用いてもらっています。県人会の今年の総会で石川文洋さんの講演会が催されたのです。石川さんのライフ・ワークはベトナム戦争を中心とした「戦争と人間」です。特にその「写真記録ベトナム戦争」は、ベトナム独立記念館に常設展示されているように、ベトナム政府によって公認された「戦争と

人間」を深く写し取った、見る者の心に深く問う力作の数々です。ベトナムやカンボジアの戦場で幾千幾万の人間の残虐な死を見てきたにもかかわらず、厳しさの中にも石川さんの目は温かく、やさしいのです。聖書の中に「柔和（プラウス）」という言葉がありますが、これは苦しんで苦しんで苦しみ抜いた者のみがもちえる何ともいえない穏やかな表情をいうのですが、石川さんの表情はその「プラウス」がぴったりするように、私は思いました。沢山の沢山の死をしっかりと見つめ続けてこられたからなのでしょうね。1965年から73年までアメリカがベトナム戦争で使用した爆弾、砲撃の総弾薬量は1,127万７千トン。この数字はアメリカが第二次世界大戦で使用した弾薬量610万余トンの約２倍、日本爆撃16万1,425トンの約67倍、広島型原爆の650発分に相当する量です。これだけでもベトナムへの攻撃がいかに激しいものであったかがわかります。こんな残酷にして大規模な殺戮と破壊を横目に、私たちは「平和」を謳歌してきたのです、「戦争」などないかのように。

今年10月、初めてのあぶらむスタッフの研修旅行をもちました。最近、韓国からの訪問客も増えたことがあって、よりよい韓国理解を求めて計画しました。私としては韓国の「独立記念館」をうちのスタッフたちに見せたかったのです。そんな中で初日、趙牧師のお宅へ夕食に招かれました。お互い言葉が不自由なため、趙牧師は力説したいところは筆談されました。その中でこんな会話がありました。「韓国人戦争歴史多観。未来希望的現像見願」。彼のこの一言は、私の心に太い楔を打ち込みました。「戦争等過去の歴史における様々な出来事をしっかりと、はっきりと見ることは大切。しかし、これからはそれらを踏まえて未来に対してどのような希望的働きを提示できるのか、これからの韓日交流の中で、そのような希望的現像を見ることを願う」と趙牧師は話したのです。　今世紀最後のあぶらむ通信です。しかし、「戦争」だけは今世紀で最後にしなければなりません。もうすぐ訪れてくる21世紀という新しい世紀の始まりの中で、私たちあぶらむの会の働きが、細やかながらも「未来にむけての希望的現像」として提示できるよう、これまで以上に努力していきたく覚悟を新たにしています。来る21世紀、もう少しはじけてみようと思っています。一層のご支援をお願いいたします。皆様にはどうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さいませ。平安をお祈りいたします。

2000年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

2001年 第6回 子供から大人までのネパールの旅、参加者募集

期間　2001年3月25日～4月5日　　お問合せ　あぶらむの会

あぶらむにはまじめな不良がよく似合う

私立高校教諭　丸　山　　恒

「いち、にっ、さん、それーっ！」
ザブーン、バシャン！「やったなあー」

これが、私がネパールで受けた洗礼であった。高校生のときに受けた洗礼の水がどうも最近かわいてきているせいか、それともも一度こびりついた罪を洗い流せということか、第二の洗礼を浴びてしまった。いや、やがて聖なるガンジスにつらなるトリスリ川で全身に水を浴びるということは、ヒンズー教徒になってしまえという沐浴だったのか？

一昨年「子供から大人までのネパールの旅」に参加しようとした私は、どうしても仕事のやりくりがつかず、大郷さんに無理をいって、一日遅れての参加を認めてもらった。カトマンズの空港に着くと、迎えの車をひたすら走らせて、やっと本隊に合流できたときは夕方だった。すでに一日のラフティングを終えた皆は、河原の砂地にテントを張ってキャンプの準備をしていた。私はラフティングというものがどんなものであるか理解しておらず、天竜川下りのゴムボート版ぐらいに思っていた。その割には皆テントにロープを張って、濡れた衣服を乾かしている。旅行のときいつも着替えをあまり持っていかない私は、「気を付けなくっちゃ」と純情にも思ったものだった。

翌朝いよいよ二手に分かれてゴムボートに乗り込み、「丸山さん、ちょっと練習します」といわれて川の中ほどまで進んだころ、いきなり信頼すべき我がメンバーどもが私の手足をムンズとつかみ、ボートから放り投げたのである。その模様が最初に記した有様である。

そうか、これがあぶらむ流の旅行か、第一の発見であった。

大郷さんが戦闘状態でもないのにみずから川に入っている。なにやら心地よさそうな顔をしている、「ああスッキリした」との言葉ですべては了解される。そのあと彼は、それがいかに心地よいことであり、いかなるテクニックを要するか、楽しそうに語る。いや、それだけではない。

この旅のハイライトのひとつに、神が住むといわれる聖なる山マチャプチャレと8000mの威容を誇るアンナプルナ山塊を間近に望める、ガンドルンめざしてのトレッキングがある。このとき大郷さんはルンギという、巻きスカートのような民族衣装を着用する。それはたしかに歩きやすそうだし、涼しそうだし、実用的に見える。しかし、腰に巻きつけただけのようなものだし、高低差のあるところを大股で歩くわけだから、どうしても麗しきお御足がチラッ・チラッと覗いてしまう。「イヤん、見ないで」と口ではいうものの、どうやら「見せたい」らしい。

そうか、彼はお尻から脚にかけての美しさに自信があるらしい、第二の発見であった。

ネパールでお土産を買おうとすると、基本的に値段は交渉で決めなければならない。始めのころ、あまり自己主張できないで高い買い物をしていた子供たちが、次第に身振り手振り、カタコトの英語を使って必死に値切るようになり、やがてその駆け引きを楽しみ、その成果を誇るようになる。水牛やロバの糞があちこちに落ちている道を歩き、時にはお腹の具合が悪くなりながらも、子供たちはどんどん逞しくなり、活力に満ちてくる。

頭デッカチになってヨロヨロしている我々が、「生きている」ということ「命」というものを皮膚で感じとり、少しでも逞しくなれるようなキャンプを日本でも実現できないか、少し前から大郷さんと話し合っていた。その具体案が検討されたのは昨年のネパー

ルの旅も最終段階、バンコクの空港レストランでお別れのビールを飲みながらであった。大郷さんたちは関西空港へ、私は成田へと帰る飛行機の待ち時間である。３泊４日で木の一生をたどろうということになり、植林・下草刈り・間伐枝打ち・伐採・製材・木を使ったもの作りおよび炭焼きという流れを考えた。日本に帰ってから大郷さんはギックリ腰で入院するというハプニングに見舞われながらも、炭焼窯を完成させ、森林組合の協力も取り付けて、その年の夏、第一回あぶらむの里体験キャンプ「木の恵み」は実施された。季節的・技術的な制約からひとつふたつ実現できなかった企画もあったが、その代わり稲ワラを叩いて柔らかくすることから始まったワラジ作りのおまけもあり、不良中（老）年どもには古川の町でビール片手にアユの塩焼きを賞味するおまけもあった。いや、そんなことよりも、スパイク付きの地下足袋をはいて、炎天下汗をダラダラ流しながら下草を刈り、昼食のおにぎりを10個以上食べていたであろう中３の悪ガキトリオがなんとも頼もしかったのを憶えている。

あぶらむの里にできた炭ガマ。出てきた炭を切る者、次のカマの単材を用意する者。皆で汗を流しての体験学習。

今年の夏は富山高専教授の寺田さんご夫妻の協力で、なんと富山湾にヨットを浮かべクルージングを楽しむことができた。「山から海へ」と題し、海辺のテントで一泊。食料は里山の恵みとして野菜をあぶらむから持っていき、タンパク質は海で現地調達。「近くに魚屋さんはあるかな？」と弱気になりながらも、なんとかそのお世話にはならずに済み、去年焼いた炭は申し分ない火力を与えてくれた。帰りのヨットで海につかり、大郷さんがなにやら心地よさそうな顔をしていたことは言うまでもない。

あぶらむプログラム「山から海へ」。
目指すは能登半島の大境港。

「今一番したいことはなに？」と聞けば、ほとんどの生徒が「寝たーい」と答える。豊かになり、なんでも簡単に手に入る社会で「生きがい」は手に入りにくくなっている。だれでもが高等教育を受けられる社会で「学ぶ意味」を発見することは難しくなっている。人並みであるために学校へ行き、一方的に詰め込まれる授業に生徒たちは疲れている。

ネパールでトレッキングをするとき、ポーターが我々の荷物を一人約50キロを担いで登ってくれる。たぶん一日500円ぐらいの日当を得るために。その中に16・７歳の少年がいることもあるし、その少年に体調を崩して背負われ、山を下った同年代の参加者もいた。カトマンズにあるヒンズー教の聖地パシュパティナートでは、今日も薪を井桁に組んで火をつけ、死者を荼毘に付けている。それを対岸から眺めている大勢の観光客と、その一人である自分。これらの体験を通じて何を想い、何を考えるか。ここに教育の一つの姿がある。あぶらむの里体験キャンプでは、自然とぶつかりながら我々の先輩たちが積み上げてきた知恵と技術に触れることができた。文部省も総合学習と称して、教育を狭い学校キャンパスから広げようとしている。それが小手先に終わらないことを願っているが、ともかく教育が学校という閉鎖空間だけで完結できた時代は終わった。あぶらむの活動は、そんな学校に多くのフィールドとアイディアを提供できるだろう。

そうか、世間はようやくあぶらむの目指すものに追いついてきたらしい、第三の発見である。

自然サマーキャンプ

立教新座中学校・高等学校チャプレン　大　橋　邦　一

1997年夏、単身私は大郷さんを尋ねたちょうどその日は、ある女子大のキャンプ中で、見学させていただけた。その時、大郷さんは倒木を指さしながら「ほら、あの倒木を見てご覧。根を見ると、浅く横に広く延びてるでしょ。だから冬の雪などの重みで簡単に倒れてしまうんだ」と言われた。私はこの話が大変印象に残り、翌1998年夏、この何もない、夜には深い闇に包まれてしまうあぶらむの里で、生徒たちが自然に触れ、自然と隣人と共に生きることを学ぶ「山村体験学習」を始めた。はじめは教職員と生徒の有志で、学校からの予算はゼロ、教職員も参加費を出し、準備は手弁当、生徒も教職員もみんないちキャンパーの意識で始めた。時計を外し、炎天下で下草刈りをしてヘトヘト、その夜小雨の中を約２時間のナイト・ハイク、翌日は約５メートルの吊り橋から、凍るように冷たい川へ飛び込んだ。ハラハラドキドキ、感動の３泊４日だった。

翌年、1999年は、リピーターの高校生中心に彼らの自主性を尊重したキャンプとなった。私も１年目とは随分違い、気楽に参加できた。地元の森林組合の方々と野球大会も出来た。結果、わが立教チームは生徒も教職員もコールドゲームだった。最後の晩にみんなで手作りしたコンサートはとても温かいものだった。特に、高校３年生諸君の男性コーラス、大郷さんのトランペット、そして「あぶらむ一家」の仮装行列には腹がよじれるほど笑い転げた。私もカールおじさんでビートルズを絶唱してしまった。

2000年夏、春に開校した立教新座中学校の生徒たちにも呼び掛け、中学高校の一貫した学校行事として「自然サマーキャンプ」となった。参加者も全体として約10名ばかり増えて33名になり、半数が中学生だ。恐るべし中学生。疲れることやめんどうくさいことを上手に手を抜く反面、遊ぶときは際限なく遊ぶ。この、のびのびしたところは大切にしたいが、中学生と言えども、自分たちで知恵を出し合い考え、大人に頼らず自ら協力して何かを成し遂げるという経験が必要かと思う。

さて、現地でわかったことだが、中学生に人気だったのはまず昆虫採集である。いつか彼らと蝶の標本を作りたいと考えている。また、川遊びも彼らは大好きである。今年は休耕田に水をはりドロリンピックをした。みんな熱く盛り上り、熱く成りすぎてルール無視の騎馬戦大将戦をして後で叱られた。その後、あぶらむ前の川を遡ってはみんな歓声をあげた。何より感動的だったのは下草刈りをしてきた山の苗木たちが、この３年間で３倍から４倍に大きく成長していることだった。３年間も続けて、ここに来ることができて、そしてあぶらむの自然とそこに生きる人たちに迎えられて、本当に幸せだと思う。

ドロリンピックの一輪車競争。押手は校長先生!!先生、生徒の信頼関係抜群です。「先生もっと速くおしなョ…」

あぶらむの良さ、まだまだ工夫できるところ、課題などもはっきりしてきたようにも感じる。今、それを文集にまとめている。これまでの恵みに感謝して、更にこの

体験学習を成長させていきたいと願っている。それでは、最後に中学１年生の感想を紹介したい。これを読まれた方、ぜひご感想をお寄せください。特にこうした体験学習に関心のある方、実行されている方、お待ちしています（kohashi@rikkyo.ne.jp）。

○ここの宿舎は普通の宿舎と違って、自分の家のように過ごせるところがいい。

○はじめ来たときは驚きでいっぱいでした。近くにコンビニがない。でも、ご飯もとてもおいしい。たべたことのないにがうりもたべたのでよかった。

○時計がないけれど、そのおかげで時間をたくさん感じることができた。キャンプファイヤーで新しい聖歌が覚えられた。電気をつかうものがほとんどなくて不便だけど自然といっしょに暮らすのもいいと思った。

ドロリンピック パートII 騎馬戦。迫力満点でした。

○下草刈りはカエル、バッタ、カマキリ、へび、オニヤンマ、カブトムシ（♂♀）がいて楽しかった。

○川で体を洗ったとき、最初ははずかしくて、ようふくをぬげなかった。

○なによりも時計がない４日間だったので「時の流れ」をゆっくり感じることができました。でも、やっぱり時計があった方がいいなと感じました。

○僕がこの宿に来てとても驚いたことは、オニヤンマやクワガタが部屋に入ってくることです。

○とっても、ごはんも空気もおいしいけれど、ちょっと虫が大きかったり、きょう暴だったりして大へんだった。６年これたらいいななんて思ったりしています。これからもこんな場所がふえたらいいなって思っています。

○高校生のお兄さんは３年生だから、もう今年しか会えないけれど、いろいろしゃべったりして楽しかった。

○昼はとっても暑くなったけど、朝や夜は昼の暑さがうそみたいにとてもすずしくなっていって、いつもエアコンをつけていたけどエアコン無しもいいと思った。

○虫が多く、処理するのが大変だった。下草刈りは、トゲのついた木が足にあたったり、日光がとても強かったりで大変だった。ご飯がとても美味しかった。ドロリンピックではドロの下に石があって、とてもいたかった。川の水がとてもきれいで冷たかった。

○大自然の中、都会ではあまり見かけなくなってしまったカマキリ、カブトムシ、クワガタを見れてよかったです。またアブやハチもいましたがスズメバチ、アシナガバチ、クマンバチの野生を見たのは初めてなので怖いながらじっと見つめていました。ドロリンピックの後の小川の水はとても冷たかったので、その後の風呂がとても気持ちよく入れました。休み時間には高校生と一緒にトランプでいろいろな事をして、楽しかったです。下草刈りの後の豚汁や果物はとてもおいしかったです。

子供から大人までのネパールの旅文集より

5回目を迎えた2000年子供から大人までのネパールの旅は、28名の大家族となりました。小学校1年生の父子など、ユニークな混成でした。ネパールの大地と風に触れた参加者の感想をお届けします。

串間千秋
（パパ）

手摺にもたれ岳がすすり泣いています。「どうしたの？」と聞きましたが、何も答えてくれません。まだ心の整理がつかず、本人も何故涙が止らないのか判断がつかない様子です。どうしようもなく私には、岳の頭を撫で続けるしかありませんでした。泣いている岳の姿を見て、何故だか岳も成長したなと思えて仕方ありませんでした。この事は、心が成長する時のジレンマみたいなものだったのかもしれません。関西国際空港でみんなと別れた後の事です。この一件で今回の旅が、岳にとってどんなに楽しく、心に残った旅だったかがよく分りました。思わずもらい泣きするところでした。

ネパールへの憧れは随分昔からあって、行けるチャンスもあったのですが、のびのびになり、今回やっと夢がかなってネパール旅行に参加させてもらえました。しかも子供と一緒に!!私は、大郷先生に面識はありましたが、あぶらむの宿を知りませんし、今回のツアーの事も先生の口から聞く迄は、知りませんでした。その話の内容からどんなツアーなのか少しは想像していたけれど、でもまったく、いや全然私の想像していたツアーとは違う素晴らしいものでした。飛行機で異国に行くと言うより、タイムマシンに乗って過去に行く、そんな旅だったように思います。ゆったりとした時間の流れの中、一日がこんなにも充実した時が送れ、こんなにも長く楽しいものだったとは…、愕然とする思いでした。煩雑としたネパールの商店街、毅然とした寺院の数々、生き生きとした目の輝きを持つ子供たち、悠々と流れる河、雄大で厳しいアンナプルナの山々、人間の生死をも超越した異教徒の文化、そのどれもが私の心を掴んで離さず胸を締め付けるような、それでいて心の底から沸き上がるワクワクした気持ちをエネルギーに変え続ける不思議なものでした。そしてこの旅で忘れてならないのは、一緒に参加しておられた多くの大人や子供たちです。親切にしていただいたおかげで岳も随分甘えるもとが出来、みんなが作ってくれた輪の中、体当たりでいろいろなことに挑戦し、悩み、一歩ずつ成長していきました。この文集をお借りして、御礼を言わせていただきたいと思います。本当に、ありがとうございました。そして、この旅を企画、運営していただいた大郷先生や、あぶらむの皆さん、旅をサポートしてくれた現地のスタッフなど、みんなに協力していただいたおかげで、安心と安堵の旅が出来、この旅を充分に堪能できるものにしてくれていたのを、忘れるわけにはいきません。機会があれば是非、いつかまた、参加させていただきたいと切に希望します。

象の入浴介助もいつのまにか水かけ合戦。川向こうのジャングルに野生のサイやトラがいるチトワン自然公園です。

川くだりが、すごく面白かったです。
ホテルに泊まったのが、面白かったです。
ジープで、ジャングルに行ったのが面白かったです。
象の水遊びが、面白かったです。
空港も楽しかったです。
猿寺も、面白かったです。
山のぼりも、面白かったです。

串　間　　岳

松　山　奈都子

朝、鳥の声がたくさん聞こえる、ほのぼのとした国。レンガ色と土色の国、ネパール。昔、父や母と一緒に暮らしていた頃の様な、なぜか懐かしさを感じます（久し振りに、お母さんに会ったような…）。ネパールの空に向かって天国のお母さんに、「今、ネパールに来ているよー」って心の中で叫びました。

ネパールの人達の生活の様子を見ていると、身近な幸せの風景を見ている様です。ネパールでよく見るのは、外でみんなでゲームをしたり、土の上や椅子に座って何人かで話をしていたり、その側で子供が遊んでいたりするところです。あれ！今日は何曜日？ネパールの人は暑い日中仕事をして疲れた頃、休憩にふっと外に出て（チェスのような？おはじきのような？）ゲームの台の所に行くと、あっという間に仲間が集まって、ゲームが始まるらしいです。時間がゆっくり流れている様な、ほっとする様な風景です。歩いているとすぐ横を、ニワトリ⁉の親子がトットットッと一列になって走っていく。アヒル⁉ヤギ、牛、犬が囲いや鎖につながれずに、みんなのびのびとして見えます。その反面、ヤギや鳥が道のすぐ横で解体されている所も眼に入ってきてワッ！とも思ったけど、あーこっちの方が自然なのかなーと感じました。ネパールに行ってくると、お金をそんなにかけずに、ほのぼのと心あったかい生活を送っていきたいなーという気持ちが、強まってくる様な気がします。

象乗り、ラフティング、トレッキング、ネパールの人の心が伝わってくる様なダンス…いろいろありました。ラフティングでは、みんなでキャーキャー言ったり…。最初は、「私、水に濡れたくないわ」という雰囲気の、たまひめ号のみんなが…ほとんどの人が、とうとう水の中へ入って泳ぎました。ふっと振り返ると、高木さん、音川さん、忍さん、みんないたずらっ子の様な、むちゃくちゃ面白い表情になっていて、ワッ！と圧倒されていたら、みんな次から次へと、自分から川の中へ入っていきました。まったく、ラフティングは、みんなの心を子供に戻してくれるんですね。

大郷先生、尚ちゃん、アショカさんと一緒に、象の上で揺られながら、風景や綺麗な鳥を見ながら、いろいろ話すのは、贅沢な時間でした。チトワンのおみやげ屋さんでは、無理に「これ買って！」「あれはどお？」と言わないおじさんで、私がハンコを見ていたら「ハイ！この紙とスタンプインキで試してみて、ゆっくり見ていっていいよ」と言ってくれました。これは嬉しかったです。おじさんの言葉にあまえて、時間を忘れてしゃがみこみ、ハンコを選びました。向かい側のＣＤ屋さんからは、ネパール音楽が流れてきます。ああいいなーこんな時間。スタンプ屋さんは、向かい側のＣＤ屋さんの音の大きさを、もう少し下げてくれるといいな、と思っている様です。「いつも、いつもだからねー」と言っていました。そこでハンコを沢山買って、おじさんおすすめの、ネパールの花の本を一冊買ってきました。封筒や、便箋に押してもいいなー。…書いていると（後から気づいたら）心だけネパールに旅していました。

トレッキングの時、カランコロンと音のする、ロバの運送屋さんとよくすれ違い不思

川に入ったついでにトイレも!?このラフティングで全員一つの家族となってしまいます。

議な感じでした。山小屋では、小中学生と忍さんの買い物に熱中している姿が、なんとも楽しそうでした。チベットの人と、だいぶ交流したみたいです。あやとりまで始めていたな。ガンドルンで、朝、山が綺麗に見えた時は、嬉しかったです。山登りの国ネパールで、トレッキングができたなんてすごいなー。

早朝、カトマンズを歩いていたら二人の子供が道端で寄り添って寝ていました。えーこんな寒い所で（朝晩は少し冷える）寝ていたのーと思って、通り過ぎていってずっと歩いて帰ってきたら、まだその二人は、道端で寄り添って寝ていました。お父さんとお母さんはいないのかなー。ゴミを集めている子供もいた。いろいろ大変だなー。

日本に帰ってきて、ネパールの人にあたたかくして貰った事を思い出します。カトマンズの空港で会った、面倒見のいいおばさん。早朝の話し相手になってくれたパン屋さん。学校に行けない子供の支援をしているウペさん。買い物につきあってくれたアショカさん。誰かが買った小さなバイオリンの様な楽器を一所懸命に直してくれたお兄さん。シェルパの人達etc…。

今回の旅行は28人と大勢だったけど、なんだか大家族の様なアットホームさがありました。関西空港で、みんなと別れる時の岳君の「もうみんなと別れちゃうの～」って言っているような？後ろ姿が、印象的でした。なぜか懐かしいネパールに行ってこれてよかった。身近な幸せを感じてこれてよかった。28人の大家族で行ってこれてよかった。ぼーっとすると正しい判断ができにくくなり、人に心配をかけたり、迷惑をかけがちな私、たまに短気な私、あっちぶつかり、こっちぶつかり、できるだけ修正をしながら、身近なほのぼのとした時間を大切にしていきたいです。久し振りの大旅行の、洋ちゃんもすごく楽しんでいた様です。めでたし、めでたし。そして私の心には、ネパールの牧歌的なほのぼのとした雰囲気が、すごく残っています。

地元「岐阜新聞」の「素描欄」に、拙文を寄せることになった。

自分を、あぶらむの会づくりにかり立てていったものは何だったのか、しばし自分のこれまでをふりかえるよき黙想の一時が与えられたようでした。ご笑読下さい。

あぶらむの会代表　大　郷　　博

旅で出合った光景

「感動」という心の震えは人を育て、時には大きな力を与えてくれる。

ネパールの首都カトマンズ、中世そのままの街並みアッサンを歩いていた時のことである。黒山の人だかりの中から「デンデン、デンデン」と小さな太鼓の音が聞こえてきた。何事かと、私もその人だかりに入ってみた。その時の光景は、私の心に一つのくさびを打ち込んだ。

両手両足とも付け根から切断された胴体だけの、それも盲目の大道芸人が、地べたにあおむけになり、その口に「デンデン太鼓」をくわえて、首を振りながら太鼓を打ち、肩と尻を使いながらいざっていた。足代わりとなっている肩と尻の皮膚がぶ厚くひび割れしているのが、破れた衣服から見えた。私はその光景に激しく打たれた。

「人間、こうまでしても生きれるんだよ。いや、生きるということは、こういうことなんだよ」と、その人は体を張って私に教えているように思えた。

そばで親方が、空き缶を持って投げ銭を集めていた。私は彼の体を張った教えに感謝して、少々多めの銭を投げ入れた。すると親方が何か言った。多分、「このだんな、お前にたくさんの祝儀をはずんでくださったぜ」と言ったんだろう。その芸人は顔を輝か

せ、一段と激しく体を揺すり太鼓を打ち鳴らした。忘れられない光景である。
長い人生旅路の中で、一度や二度は試練に直面する時がある。また、なければ人生の深まりはないと思う。その試練は、自分一人の力で乗り切れるものではない。そんな時、これまで出会った「人生の良き旅人たち」や、旅で出合った光景などが不思議と大きな力を与えてくれる。自分の旅としての人生をしっかり歩むために、「感動」という心の震えを大切にしたい。

旅の伴侶

40歳という年は「キケン」な年齢である。それまでの生き方を変え、夢を実現したいという思いが強くなってきた。だが職を離れるということは死活問題。夢への挑戦か現状維持か、私の悩みは深かった。4人の子供を抱えての夢への挑戦は、野たれ死にと背中合わせの道でもあった。
そんな悶々としたある日、「何をそんなに悩んでいるの。あなたの両方の親を見なさい。あなたはその中間の年。あなたにもできます」と、わが女房がさりげなく言った。
「私の両方の親」。私の父は48歳の時、富山の空襲で全財産を失った。10人の家族を抱えての再出発。女房の父親は32歳で失明、戦争など多難な時代、9人の家族を抱えての苦難の人生だった。「あなたはゼロから再出発した親を両手に持っているのだからあなたにもできますよ」。この一言は私に大きな大きな力を与えてくれた。
私はこの体験から、結婚式のスピーチで花嫁に「この男のために一世一代の名セリフをはいてやってください」と頼む。名セリフというものは偶然にしてはけるものではない。相手が何を考え、何を求めているか、不断の観察と配慮が求められる。その中から、人の転機につながる名セリフが生まれてくる。
女房の名セリフによって新たなステージに押し出された私、人間腹が決まれば後は簡単。退路を断てば前に進む道しかないので迷うこともない。何よりも旅の伴侶がいると思うだけで足取りも軽くなる。
英語で「さよなら」を「グッド・バイ」という。語源の「ゴッド・ビ・ウィズ・ユー」（神があなたとともにありますように）を知る人は少ない。人間、「共に在る」という実感ー、旅の伴侶を持つと心強い。旅する大きな力である。

旅の終わり

初めての随筆、不安のうちに書き始めた「旅」も終わりにきた。終わりの話としては少々下ネタだが、お許し願いたい。
1980年から数年、ネパールで実験農場を経営した。そのためネパールへは頻繁に通うこととなった。
ネパールのトイレは自然一体型。トイレと名のつく場所はなく、「この大地がそれ」である。彼らは空き缶に水を入れ、野に出かける。事が終われば左手に水をためおしりにかける。ウォシュレットの原型である。私はといえば、かさばるトイレットペーパーを日本から持参。何年たってもネパール式には抵抗があり、できなかった。
そんなある日、「気持ちがいいですよ」の一言に誘われ、挑戦することになった。彼らのようにわずかな水で、というわけにはいかず、貴重な水をバケツに用意した。
左手に水をためおしりにかける。何度も水をかけ、手でぬぐった。その時、何とも言い難い気持ちになった。それまでは汚い物としてふき捨てるようにしていた私。自分の身体の中の日の当たらない所で、こんな仕事をしてくれている部分があったことを初めて実感した。私は「ありがとう、ありがとう」と言いながら何度も手でふきなでた。何か深いところで自分と和解できたかのような、安らいだ不思議な気持ちだった。それは実にそう快な気分だった。
宿屋の主をしていると、いろんな人から相談を受ける。その中で一つ感じることは、自分と「和解」できている人は多くないということである。人生で受けた傷や受け入れ難い現実など私たちはいろんな自分を背負っている。しかしそれらすべてが私である。それらを認め、受け入れる時、本当の私の人生旅路が始まるんだと、私は思っている。

寄付者一覧（'99年12月1日～'00年11月30日）

磯貝澄美子／金子美祢子／松岡和夫／東京聖テモテ教会／金澤泰三／原川恭一／森田トミ／牛窪千賀／越田信／増山ふみ子／岡登正子／野崎久子／小畠誠司／株式会社アリミノ（田尾兵二）／形部賢／浜中好美／三和哲子／中西正己／森本光生／松岡秀子／進藤武／小金井聖公会／熊谷一綱／鈴木豊子／今関公雄／三沢悠子／市川秀一／佃寿子／吉岡邦英／清水秀明／加倉井佳子／木村秀子／吉田修／八代洋子／島田信弥／梶原恵理子／朝比奈誼・時子／紅林みつ子／宮古聖ヤコブ教会／山岸勇一郎・悦子／福田詩郎／中村芳枝／高島富美江／長谷川秀司／佐倉淑子／富山聖マリア教会／水野洋子／鈴木正士／柳下功／池崎純一／山崎俊樹／山崎美貴子／笹岡節夫／荒井優仁・彩月／倉石昇／市川聖マリヤ教会／渡辺直明／江見淑子／千葉復活教会／工藤真喜子／田島義信・静子／山形（上林由利）／久保田彰／和田恵子／斉藤洋明／寺田信一／遠藤哲／田中良明／浦和諸聖徒教会／福岡女学院中学高校宗教部／萩原康宏／小野成子／円居久枝／永原照明／高瀬留美／稲垣昌子／柳川ハル／上田敏明／久田広子／掛川尚子／本間勇吉／栗原千代／長尾文雄／湯田啓一／祈りの家教会／常見幸代／鵜川雅行／東璋子／柏聖アンデレ教会伝道所／中山雅子／鈴木茂男／財満研太郎・由美子／伊藤栄子／木村富昭・秀子／谷市三／小林理子／小林賢三・佳子／午腸とも／岸井孝司・ミツ子／下畑幹／宮城正男・正子／白木晃／京都聖光教会有志／沖縄県人会高山支部／坂本吉弘／酒井一俊・貞子／岐阜バプテスト教会／大城豊次／森紀旦・敦子／石地豊蔵

新規会員（'00年11月30日現在）

宇佐見一直／池田正毅／宮本龍子／河瀬一利／小島敏弘／杁山博・逸子／中村勝博／宮城正男・正子／松山佳弘・奈津子

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。